# フェルナン・プイヨンのレ・サブレット戦災復興
# 海浜休暇村の集落設計にみる石と中庭と地中海のヴィスタ
# Fernand Pouillon's War-Damage Reconstruction of Les Sablettes: Stone, Courtyard and Mediterranean Vista in the Settlement Design of a Seaside Holiday Village

坂元 葉蔵*, 直江 璃恭 ,* 岡本 みもり*, 松原 康介**
Yozo Sakamoto, Riku Naoe, Mimori Okamoto and Kosuke Matsubara

This study examines the war-damage reconstruction of Les Sablettes, a seaside holiday village near Toulon in southern France, planned and realized by Fernand Pouillon between 1950 and 1953. A late nineteenth-century resort founded by Michel Pacha, the village was destroyed during the Second World War, leaving only the victims' small plots. Having earned the recognition of Pierre Dalloz through the La Tourette district in Marseille, Pouillon designed a single block of thirty-five dwellings and twenty-eight shops. Facing sanitary rules requiring rooms of at least nine square metres and compensation that reduced former areas by some thirty per cent, he guaranteed equivalent living space with added facilities, financed by surplus stone from the Vieux-Port works. Low-rise housing lines the main road, and a central square opens towards the sea. The tower, terracotta claustras and craftsmen's ornament were later carried over to Algiers and the Paris suburbs.

*Keywords*: Southern France, MRU, Resort Development, Diversity, Low-rise Collective Housing, George Candilis
南フランス，復興・都市計画省，リゾート開発，多様性，低層集合住宅，ジョルジュ・キャンディリス

## 1. 研究の背景と目的、方法

### 1-1. 研究の背景

第二次大戦で甚大な被害を被ったフランス各地の都市では、1944 年に設立された復興・都市計画省(Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme ; 以下、MRU と記す)が各地に委任した主任建築家を中心に、急進的なモダニズムと歴史的文脈を継承する伝統主義・地域主義との間で、多様な復興都市計画が行われた [6]。このうち南仏最大の都市マルセイユの旧港の復興は、石材利用を得意とすることで知られた地元出身の都市計画家フェルナン・プイヨン(Fernand Pouillon ; 1912-1986)[1]が主導したが、そのきっかけは、トゥーロン近郊の休暇村レ・サブレット(Les Sablettes)の復興計画がMRU に高く評価されたことであった [26]。レ・サブレットは、軍港トゥーロンの南約 6km、南北に海を望む地峡上の集落であり、今日ではプイヨンの復興した集落[2]とフェルナン・ブローデル公園からなる、軍港関係者と地域住民のための海浜休暇村となっている。プイヨンが得意とした鐘楼と海の見えるヴィスタ、中庭を持つ低層集合住宅から構成された地区であり、小さいながらもプイヨンの「地中海的多様性」が実現されたものと位置付けられる。

既往研究として、まず、レ・サブレットを主題的に扱った唯一の研究として Fuzibet (2001)[13]が挙げられる。行政文書に基づき本計画の事業経過を明らかにしたもので、本稿においても重要な参考とするが、実現された空間構成の評価や、プイヨンの計画論における位置づけには立ち入っていない。次に、プイヨンに関するモノグラフ的研究が存在し、Voldman (2006)[21]、Bédarida (2012)[4]が生涯業績を通観するが、レ・サブレットへの言及は限られている。フランスの戦災復興計画を扱った研究としては、Voldman (2006)[22]が国家政策と法制度を、Vialard (2023)[20]が被災都市の空間構造の変化を明らかにしているが、対象はいずれも都市規模の復興プロジェクトである。戦後の地中海休暇村研究としては、1963 年設置のミッション・ラシーヌによるラングドック＝ルシヨン沿岸開発を中心に蓄積がある。Racine (1980)[18]は事業を主導した当事者（副市長）の記録である。Furlough and Wakeman (2001)[12]は、ミッション・ラシーヌによるラ・グランド・モットの開発を国家と地域の協働の観点から明らかにしている。一方、Paminello and Bécot (2019)[17]は、開発以前の沿岸敷地は無人の荒地であったとする計画者側の言説を批判し、19 世紀の療養地に起源をもつ 20 余の観光集落が既に存在し、その多くが地域住民の建てた仮設的な住居に占拠されていたことを示し、既存の地域集落との関連を議論している。日本語では望月(1990)[28]がフランスのリゾート開発論を概括している。いずれも 1960 年代以降の国家的リゾート開発を対象とした研究である。なお、レ・サブレット周辺地域の形成史を明らかにした Gaignebet (1948)[14]があるが、プイヨン以前の成果である。

以上を踏まえると、レ・サブレットには、以下の 3 点の論点があるものと考えられる。第一に、本計画の事業経過は Fuzibet (2001)により明らかにされている一方、MRU に評価された計画内容、特に空間構成の実相は検討されてこなかったこと。第二に、都市規模の復興が研究の中心を占めるなか、本計画は 25 平方メートル程度の敷地しか持たない被災者の居住地再建として構想された小規模集落であり、MRU の復興としては最小規模の事例としてみられること。第三に、国家的リゾート開発に十数年先行し、外来の観光客向けだけでなく、地元被災者の生活の場として計画された休暇村という点である。

### 1-2. 研究の目的

そこで本研究は、プイヨンが計画し実現したレ・サブレ

*学生会員 筑波大学大学院理工情報生命学術院社会工学学位プログラム 前期博士課程
**正会員 筑波大学理工情報生命学術院社会工学域都市計画分野・国際総合学類国際開発学主専攻
(University of Tsukuba, Graduate School of Systems and Information Engineering, Urban Planning Studies)

ットの集落空間を対象に、いかなる経緯と意図で計画され、いかに現在の空間に結実しているのかを明らかにし、その計画的成果の全体像を示すことを目的とする。

### 1-3. 研究の方法

本研究は、文献収集分析と現地調査に基づく都市計画史的方法からアプローチする。プイヨンの自伝『石叫ぶべし』[3]を中心とし、市の行政文書、及び当時の雑誌記事等からなるテキスト類、1950年9月28日付の都市基本計画図、更に、古地図、古写真を用いる。更に、観察、撮影を中心とする現地調査[4]を実施した。更に事業面に関する補足情報として、Fuzibet(2001)を参照する。

また、「地中海的多様性」の定義として、プイヨンがマルセイユの旧市街について描写した*「全体が階段状円形競技場のようになっていて、教会や鐘楼、低い家々や立派な建築がアルジェのカスバのように多様さのなかに秩序のある、調和の取れた一体を成していた」*(p.64)を原義とし、高低差のある多様で稠密な空間を評価する場合に用いる。

2章では地峡の形成とミシェル・パシャによる休暇村の成立過程を概括する。3章では戦災の実態と、マルセイユでの活動を経てプイヨンが本計画を担当するに至る経緯を明らかにする。4章では1950年のプイヨン計画とその実現過程を追い、被災者の権利条件、石材の再利用、実現された集落の空間構成と装飾を分析する。5章では望月の時期区分に照らして本計画を戦後フランスの海浜リゾート開発史のなかに位置づけ、キャンディリスの余暇集合住宅との比較を行う。

## 2. レ・サブレットの形成と休暇村としての発展

### 2.1 レ・サブレット地峡の形成

レ・サブレットは、地中海に突き出たシシエ半島の東側に位置する。18世紀初頭よりトゥーロン港との関係から造船業で繁栄したコミューン、ラ・セーヌ＝シュル＝メール(La Seyne-sur-Mer)の一地区である[1]。南に地中海、北にラザレ湾を望む地峡は、かつて海であった。トゥーロン港の入口に位置するセペ島とラ・セーヌ＝シュル＝メールの間は船の通り道(Passage)であり、半島東側は船が時折座礁する岩礁海岸であった(図1)。

図1 1625年のレ・サブレット周辺 出典：文献3)を基に筆者加筆

この海峡には長い年月をかけて砂が堆積し、トンボロと同様の過程を経て、1657年に地峡が形成された[3]。これが今日のレ・サブレットである。ただし地盤は不安定で、19世紀半ばに至っても建物は殆ど存在しなかった(図2)[3]。

図2 1820–1866年のレ・サブレット

### 2.2 ミシェル・パシャによるリゾート整備

この地に発展をもたらしたのは、オスマン帝国の灯台局長(Directeur des Phares de l'Empire Ottoman)として沿岸の灯台網整備に貢献したフランス海軍士官マリウス・ミシェル(Marius Michel; 1819–1907)であった[5][3]。ラザレ湾周辺の景観にボスフォラス海峡との類似を見出したミシェルは、周辺の土地約400haを購入し、1880年代以降、レ・サブレット北方のタマリスに拠点を置き保養地の整備を始めた。タマリスにはオリエント趣味の建築が多数建てられた。レ・サブレットには1887年、夏の海水浴場サブレット・レ・バン(Sablettes-les-Bains)が整備され、カジノとグラン・オテルが開業した(図3)[3]。トゥーロンから蒸気船で訪れるブルジョワ層を迎えたレ・サブレットには、更にホテルや小学校も建てられ、戦間期にはパリやイギリスからも訪問客のある休暇村として発展した。第二次大戦前の集落空間は、大型のリゾート施設が並ぶ、上流階級のための休暇村に成長していた。

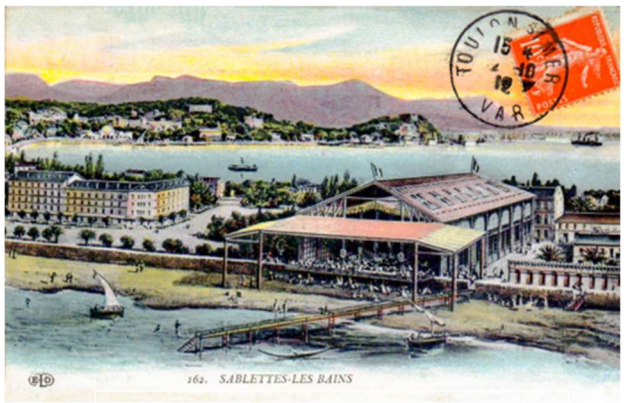


図3 サブレット・レ・バン 出典：文献3)

レ・サブレットは在来の村落の発展ではなく、単一の主体を中心に、19世紀末に外来様式も取り入れ創出された新興リゾート地であった。プイヨンは「伝統的な村を建設しようと思った」と述べているが、そこに復元すべき伝統的村落が存在していたわけではなかった。

## 3. レ・サブレットの戦災とプイヨンの参画

### 3.1 レ・サブレットの戦災

1907年のミシェル・パシャ没後、レ・サブレットは1936年の有給休暇制度の導入を背景に庶民にとっても観光の場とされた。第二次大戦が始まると、軍港トゥーロンの至近であったレ・サブレットは壊滅的な被害を受けた[2]。1944年、ドイツ占領軍は連合軍の上陸を阻止するため村を爆撃し焼き払い、カジノや小学校が徹底的に破壊された[1)16)]。ドイツ軍の宿舎として使用されていたグラン・オテルと「スザンヌ」「レ・フォヴェット」の2棟のヴィラのみを残して、レ・サブレットは完全に灰燼に帰した(図4)[7]。

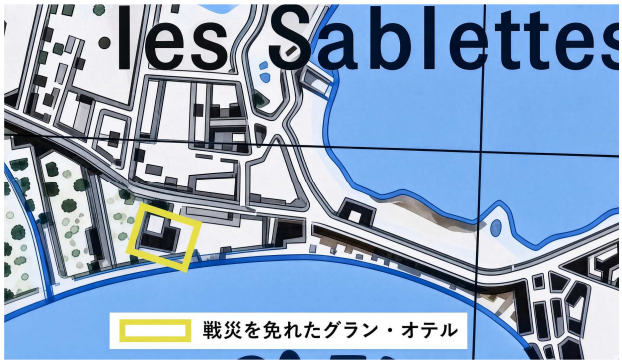


図4 1950年のレ・サブレット

戦後初期の復興は、住民自身による交通網の復旧や残存物の処理といった初歩的なものに留まった[16]。1948年10月15日、県令によりレ・サブレット復興組合が設立され、ヴァール土地整理総監の監督のもと、土地所有権は組合に移されて、事業終了後に区画を再配分することが定められた。また、復興組合によって地元出身のレイモン・コロワイエ(R. Conroyer)が担当建築家に選任された[13]。

プイヨンが担当者となった時、レ・サブレットは、19世紀の休暇村が喪失され、被災者の零細な敷地割だけが法的に存在するという状態であった。

### 3.2 マルセイユからレ・サブレットへ

1934年にエコール・デ・ボザールのマルセイユ校を単位取得退学し南仏で活動していたプイヨンは、1942年、正式な卒業のためボザールに戻り、指導教員にしてマルセイユ市の主任建築家であったボードゥアンの下、マルセイユの仕事に従事していた。「フランスで最も素晴らしい特別な界隈」と彼が呼んだマルセイユ旧市街もまた大戦で破壊されていた。低層稠密で立体的な空間の喪失を憂慮したプイヨンは、地元建築家として戦後復興事業に携わることとなったが、ロジェ・エクスペールやアンドレ・ルコントといったパリから送られてくるボザール系の主任建築家の下、脇役に回ることが多かった[5)26)]。

しかし、1947年に担当することになった高台のラ・トゥーレット地区において、石材を活用し、装飾も取り入れた集合住宅を実現すると、MRU大臣官房長ピエール・ダロズから「*あなたの建物はひじょうにいい（中略）ここで見たたった一つの興味ある具体例と思っています*」(p.88)と評価を受けた。当時MRUの特別顧問で建築家であったポール・エルベからも賞賛を受けた。

1950年、ダロズは更に、「あなたをレ・サブレットに天下りさせることに決めたのです。一区画全体修復しなければならない。あなたならいい計画をつくるでしょう」(p.87)とプイヨンに電話で辞令を伝えた。プイヨンはすぐに現地へ赴き、数週間で計画を立案したという。「素晴らしい砂浜に沿った昔のレ・サブレットの集落の場所に、私は伝統的な村を建設しようと思った」「低い漁師の家、店、ホテル、住居のある本当にかわいいもの」を計画したいと述べている。

## 4. プイヨンのレ・サブレット復興

### 4.1 プイヨン設計の計画

1950年9月28日付の基本計画全体図（図5）には、プイヨンに加えてルネ・エジェ(R. Egger)と先述のコロワイエの三名が連署している。ただし市の行政資料には「フェルナン・プイヨン作成の基本計画の全体平面図(plans d'ensemble de l'avant-projet rédigé par l'architecte Fernand Pouillon)」と記されており、計画の立案者がプイヨンであったことがわかる。

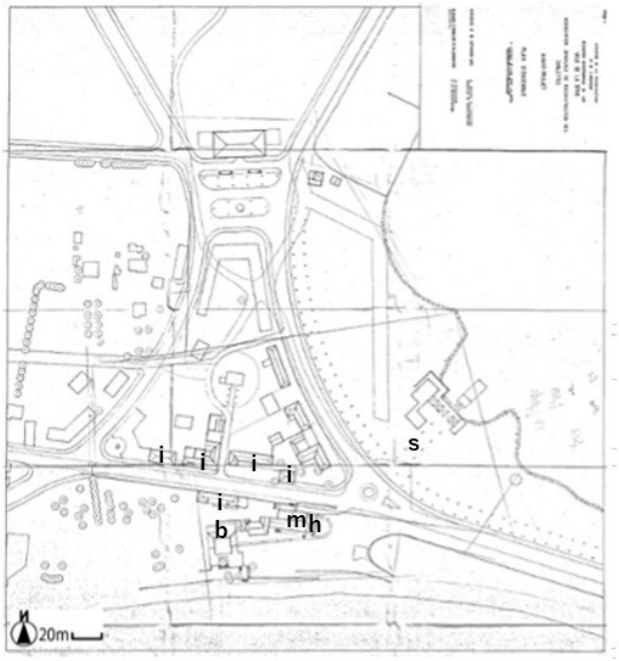


図5 1950年9月28日付の基本計画全体図
所蔵：ラ・セーヌ市文書館

図面からは、東西および北方向に放射状に幹線道路が伸び、その中に三角形の街区を構成する計画であったことが読み取れる。街区の中央には楕円形の広場が、幹線道路の交わる北のタマリスとの境界にも広場が計画されている。

計画された施設については、二つの数値が伝えられている。プイヨンは自伝で「*40戸の住居、2軒のホテル、15ほどの店舗、浴場施設、ガソリンスタンドを建設するために、私は1億1000万フランの融資を得ていた*」と述べている(p.109)。一方、確定した建築計画の内容としては、住宅35戸、店舗28のほか、寄宿舎、ホテル、浴場施設、ガソリンスタンド、給水所や変電所などの公共施設が挙げられてい

る[13]。すなわち当初想定は40戸、確定した建築計画では35戸であったものとみられ、住宅を減じ店舗と公共施設を増やす形となっており、被災者の要望に応じて計画が調整されたことがうかがえる。

なお、隣接して再建されたカジノとオテル・デュ・ゴルフは、それぞれガストン・プティとルシアン・バルベによる別設計であり、プイヨンの計画には含まれない[13]。

模型[6]からは、ラザレ湾に面する小港の存在、一棟の中層棟を除きほとんどが低層棟による構成であったこと、小港の周辺に多くの植樹が計画されていたことも読み取れる（図 6）。中層棟は低層棟の中でランドマークの機能を果たしており、プイヨンが得意とする「鐘楼」の役割を想起させる。

### 4.2 石材の再利用による「伝統的な村」の実現

戦前には大規模なリゾート施設が立ち並び、ブルジョワ層が訪れる休暇村であったレ・サブレットにおいて、プイヨンが目指した「伝統的な村」とはどのような集落だったのか。この計画については、フランスの教育機関 Réseau Canopé が刊行した現代建築の教材[19]が自伝に基づく概要と現況を紹介している。本節では、自伝の記述を被災者の権利確保という観点から検討する。

現地に赴いたプイヨンが自伝で強調したのは、地元住民の敷地面積の少なさと劣悪な居住環境であった。*「レ・サブレットの被災者の大部分は戦前に25平方メートルくらいの表面を占める、非常に小さな地主であった。漁師、小商人、退職者がかつて板とベニヤにタールを塗り、何の設備もない煉瓦の子屋を建てた。今や、誰に対しても衛生規則と最低9平方メートルの部屋に住むことが強制された」*(p109)。

被災者の多くは戦前に25平方メートルほどの土地を持つ零細な地主で、漁師、小商人、退職者が板とタール紙、煉瓦で設備のない小屋を建てていた[7]。最低9平方メートルの居室という衛生規則については、1902年公衆衛生保護法に基づく衛生規則により、最低9平方メートルの居室という基準が掲げられていたが、今回の再建を機に適用されることになったものである。プイヨンによれば、被災者の権利評価は*「行政当局のあらゆる厚意にもかかわらず、昔の表面積をさらに縮小させた。建築の年数と価格を考慮すると、古ぼけて不安定な建物は30パーセント方目減りするのであった」*(p.109)。すなわち、衛生規則が面積の下限を引き上げる一方、復興補償の算定は各地主の所有面積の30パーセント相当を削るという条件下にあったと言える。

自伝によれば、プイヨンはこれに明確に対応している。

*「私はこれらの正直な人々を集め、彼らの居住面積が減らず、同じ部屋数の上に便所洗面所が付け加わることを確約した。（中略）あなたがいつかレ・サブレットの村を過ぎるなら、その修復は全部で一億一千五百万以下の費用ですみ、被災者の財布のひもは締めたまま、彼らの家が大きくなり美しい材料で再建されたのだということを思い出したまえ。」*(p.110)

計画策定時の融資金額1億1000万フランに対し、完成時の費用はこれを 500 万フランほど上回っただけであったということになる。それも、居住面積も部屋数も減らさず、所定の衛生設備を導入した上でのことであった。

その実現のためにプイヨンが採った手法が、マルセイユの現場で生じた余った石材の再利用である。石材は、1948年のコンペを経て、マルセイユ旧港で用いるよう MRU が決定していた。プイヨンもまた、「私は石で修復しようと決めてあった」と述べている[9]。同時期に進行していた旧港の復興事業現場では、ローマ時代にポン・デュ・ガールに用いられた石として知られるフォンヴィエイユ産の石灰岩が用いられていた。この石材はポール・マルスルーの管理する採石場で成形され[8]、旧港の現場で用いられていたが、余った石材が無償で提供されることとなった[13][8]。

それは、「だれの役にも立たないこの無恰好な石」だったからであるが、プイヨンはその価値を住民にも丁寧に説明している。

*「とりわけ文句の多いある被災者の女が総会の席上、なぜ私が石をただでもってくるのかと訊ねた。「もっと美しくもっと丈夫にするためです」と私は答えた。「しかし、この石は私にはとびきりとは見えませんね。貝殻で一杯ですよ」「しかし奥さん、それはずっともちがいいのです。ポン・デュ・ガールを建てるのに使われたのですよ」「で、そこの人には文句がないんですか」「そうです。約二千年経ってもどんな苦情も出ていませんね」と私は率直に答えた。一同は爆笑し、それから石にはその夫人の名前がつき、*

**図6 プイヨン計画の設計模型図 出典：文献4)**

*被災者は今でもその話を語り草にしている。」* (p.110)

住民が「貝殻で一杯」と表現した、コキーユ石灰岩(calcaire Coquille)と呼ばれる淡黄色の石によって、レ・サブレット集落は安価に実現したのである。

### 4.3 レ・サブレット復興集落の特徴

#### 4.3.1 集落の空間構成

工事は1952年3月の入札を経て、約9か月で1953年に完了した[13]。プイヨン自身は「修復は数か月で終った」と述べている[9]。実現され今日に至る集落の空間構成は図7のとおりである[10]。幹線道路シャルル・ド・ゴール通りを軸に建物が並び、歩道が整備され、区画中央に広場空間を創出する配置がとられている。道路は、海岸線と平行に走る主要な都市軸、広場によって区切られた商店街としての街路、これらに交差する歩行者用通路と、明確に区分できる[13]。放射状道路計画を基礎に、概ね計画図通りに実現されたものと言ってよい。

中心となる施設は集合住宅である。基本は2階建の低層棟で、1階が店舗、2階が住宅として利用され、交差ヴォールトのアーケードと木製手すりのバルコニーが設けられている(図 7-C)。ヴォールトの素材は、漆喰の下に見える煉瓦である[11]。1階を店舗、2階を住宅とする構成自体は南仏の街路型建築に一般的だが、本計画ではこれが25平方メートル前後の被災者個々の敷地に対応して反復されており、立面には狭い間口の単位が連続する。プイヨンが「伝統的な村」と呼んだ外観上の稠密さは、意匠上の選択である以前に、旧敷地割を再建の単位としたことの直接の帰結である。アーケードは、この細分された敷地の前面を連続させ、個別の再建を街路としての一体性へ束ねる装置として機能している。構法の面でも合理化が図られており、階高の標準化とともに、鉄筋コンクリートの壁繋ぎやまぐさの前面に石材を配して型枠を兼ねさせる手法がとられた[13]。すなわち組積造に基づく伝統的構法を再現したわけではなく、プレキャストの石材をRCの補強も交えつつ構成したものであった。

集落唯一の中層棟(6階建)は当時ホテルとして建てられ、現在はオフィスや店舗のテナントに転用されている。中層棟は周囲の低層棟や広場空間のなかで視認性に優れたシンボルとなっている。塔状の棟については、イタリア中世都市の塔を参照したものとの見方がある[13]。他方、基本となる建物と階数を大きく異にする一棟をシンボルとして設ける手法は、プイヨンが後にアルジェで実現した集合住宅において中低層の住棟群のなかに高層棟を配する構成として現れ[26]、パリ郊外のポワン・デュ・ジュール団地でも同様に見られる[24]。いずれも「鐘楼」コンセプトの具体化である。集落のシルエットを一点の垂直要素によって基礎づけるという手法が、レ・サブレットにおいて現れたものと考えられる。

ホテルの1階正面の広場から、幹線道路に対して垂直に通路が通され、広場とビーチ空間を結んでいると同時に、幹線道路側から地中海へのヴィスタが開けている。海への眺望の確保自体は海浜建築に一般的だが、ここでは住宅群の間を貫く通路という形をとっている。

広場は幹線道路によって南側のジャン・ルルサ広場と北側のラロ広場に分けられている。現在は松が植えられて日陰が生まれ、近隣店舗のテラス席として利用されている。ホテルとビーチの間は金属製の支柱に支えられた煉瓦のア

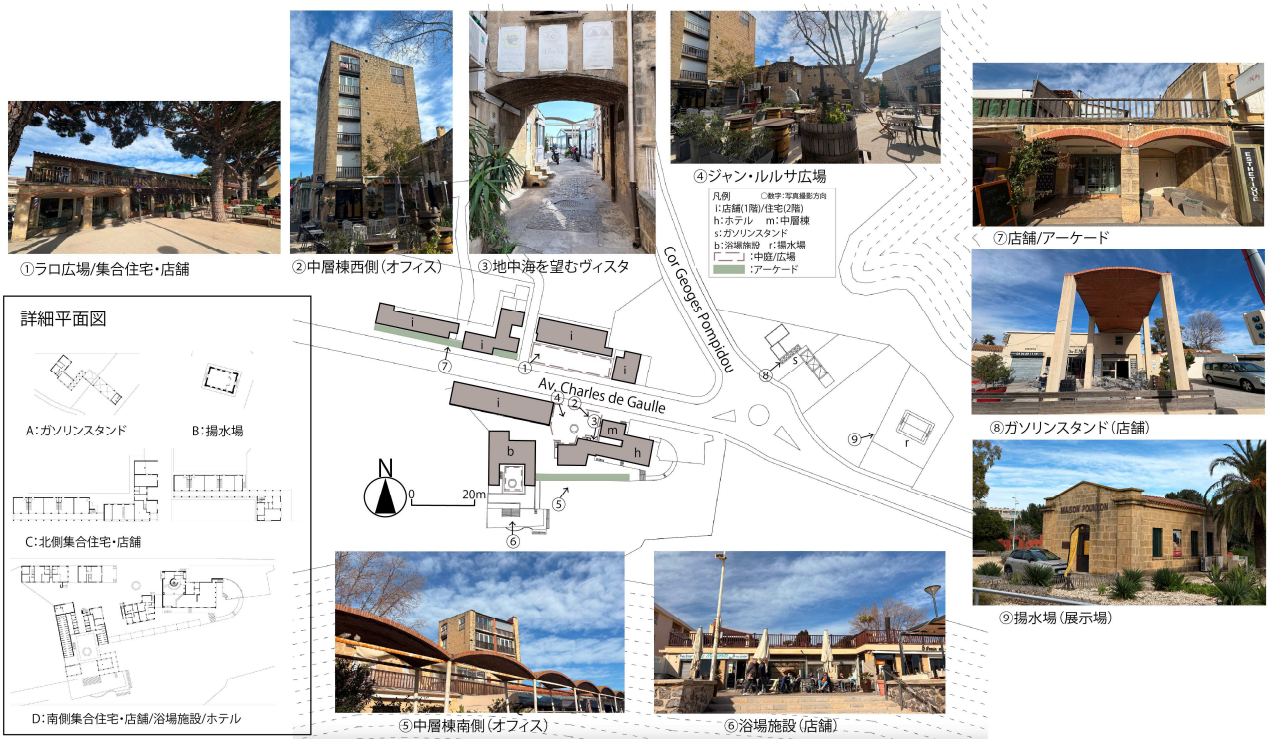


図7 現地調査に基づくレ・サブレットの空間構成と主要な景観(筆者撮影)
文献11をもとに筆者作成、詳細平面図Dの浴場施設部分は文献15による

ーケードが展開するエスプラナード[12]となっている。経年劣化がみられるが、低層棟が広場を囲み、その脇に中層棟を配する構成は、滞在者の身体寸法に即した街区スケールを示している。

その他の施設としては、地中海沿いに浴場施設が挙げられる。中庭型の構成をとる2階建で、2階の地中海側は一部がバルコニーとなっている(図 7-D)[15]。中庭型はプイヨンが同時期にマルセイユのラ・トゥーレット地区で採用したものでもあり、海に開いたバルコニーと閉じた中庭を一棟のうちに併置する構成は、海浜施設としての開放性と集落側への居住的な閉鎖性を同時に成立させている。現在はカフェやレストランに転用され、ビーチとの間にテラスが設けられた。幹線道路沿いの区画に対して東側、今日公園として整備されている区画にはガソリンスタンドと揚水場が実現された(図 7-A・B)。前者は増改築されて店舗に、後者は「プイヨンの家(MAISON POUILLON)」の名で展示場に転用されている。生活に必要な最低限の施設が一区画にまとめて設計されたことがわかる。なお、計画に含まれていた小港は実現された形跡がみられない。

#### 4.3.2 集落の装飾

実現された集落には、二種の装飾が用いられている。一つには、焼成陶土によるムシャラビーエ風の透かしブロック(claustras de terre cuite)[13]である（図 8）。浴場施設の東側ファサードでは水平方向に連続して用いられ、集合住宅でも階段室やバルコニーの一部に見られる。あわせて木製のムシャラビーエも製作されており、開口部を塞ぐ装置は陶と木の二種が併用されていた[13]。もう一つには、プイヨンが繰り返し起用した職人作家による陶芸と彫刻である。ジャン・アマドが公共噴水と陶器壁画を、フィリップ・スールディヴが浴場施設の噴水とパティオの陶板を、ルイ・アルノーがジャン・ルルサ広場の噴水の彫像を、カルロス・フェルナンデスがホテル壁面の陶皿（図 9）を手がけており、いずれもプイヨンの「常連の友人たち」と記されている[13]。プイヨンがエクスやラ・トゥーレット等各地の現場で繰り返し起用した協働者による作品であった。

図 8 ムシャラビーエ風の透かし窓

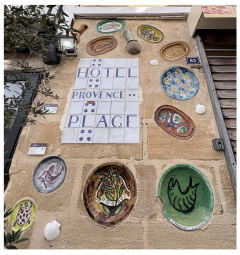


図 9 陶器壁面

集落の構法は、石積みの壁、石の柱の上に架かる煉瓦の交差ヴォールト、そして陶土の透かしブロックからなる[11]。すなわち石・煉瓦・陶の三素材によって構成されており、開口部という構造上の要素そのものを装飾としている。

透かしブロックの採用において、レ・サブレットの復興(1950-1953)に先行するのは、ラ・トゥーレット地区(1948-1953)である。そこで用いられたムシャラビーエにも似た透かしブロックは、マルセイユ旧港の直後から開始されたアルジェ三地区においてより「ムーア建築」的に実装され、次いでポワン・ドゥ・ジュール、ムードン・ラ・フォレといったパリの郊外団地地区においても継承されることになる。

完成した集落についてプイヨンは次のように述べた。

*「全体ができあがってみると、あまりにきれいすぎるという欠点があった。装飾がいたるところに現れ、この村は映画を撮るためにできていた。私は長いこと、もっと厳しくしなかったことを後悔した。しかし、トゥーロンとセーヌの浜の休暇村なのである。」*(p.110)

装飾は「伝統的な村」を演出する手段であり、彼自身がその演出性を認識した上で、より厳しくすべきであったことを悔いている。装飾は近代空間の均質さを補うが、過剰となれば映画のための空間となりうる。そのバランスは、当時のプイヨンにおいても課題であった。

## 5. 休暇村としてのレ・サブレット

### 5.1 戦後フランスの海浜リゾート開発における位置

プイヨンによるレ・サブレット復興計画は、戦後フランスの海浜リゾート開発史にどう位置づけられるだろうか。望月(1990)[28]は、1950 年代を個別整備の時期、1960 年代以降を計画に基づく総合的なリゾートづくりの時期、1980 年代以降を完成に近づく時期として定義している。これを踏まえて開発主体と住まい手のあり方に注目すると、1950 年代のリゾート整備は戦災復興と並行して個別の敷地単位で進められ、その主体は被災者組合と MRU の委任建築家であった。ミッション・ラシーヌが設置された1963年以降70年代にかけては、国家が沿岸を一括して計画対象とし、新規に来訪する大衆観光客を受益者とする総合的なリゾート開発が行われた[12][18]。そして 1980 年代以降、開発は概ね完了し、環境保全と既存施設の更新が主題となったと言える。

レ・サブレットの復興は 1950 年代に位置付けられるものの、ミッション・ラシーヌ期の国家主導型開発に対する示唆を含んでいたように考えられる。ラングドック沿岸には、19 世紀の療養地に起源をもつ 20 余の観光集落が既に存在し、有給休暇制度の導入以降、住民の建てた仮設的な小屋によって占拠されていた。ミッションはこれらを美観上・衛生上の問題とみなし、その除去を優先課題とした[17]。これに対しプイヨンは、板と煉瓦とタール紙の小屋に住む被災者を集めて居住面積を減らさないことを確約し、彼らの敷地を再建の単位とした。これは一般大衆の居住環境改善を旨としてきたプイヨンの事業らしい特徴と言えよう。

### 5.2 キャンディリスの余暇集合住宅との比較

60 年代のリゾート開発の事例として、プイヨンが常に批判的であったジョルジュ・キャンディリス(1913-1995)が1960年代にバルカレス＝ルカート（Barcarès-Leucate ; 南仏オクシタニー地域圏）に実現した余暇集合住宅に注目し、本計画と比較する。両者はいずれも庶民住宅への問題意識を持ち

ながらも作風を異にしており、それぞれの特徴が空間形成に現れるものと考えられる（表1）。

表1 バルカレス＝ルカートとレ・サブレットの比較 出典：筆者作成

| 項目 | バルカレス＝ルカート | レ・サブレット | 判断根拠 |
|---|---|---|---|
| 高さ | 2階建低層および<br>5-6階建中層 | 1–2階建低層、<br>うち1棟のみ6階建 | 図面・<br>現地調査 |
| 配置 | グリッドに基づく<br>幾何学的高密度配置 | 幹線道路に平行、<br>区画中央に広場 | 図面 |
| 住戸構成 | 方形ユニットの<br>組み合わせによる構成 | 1階店舗・2階住宅、<br>海側にバルコニー | 図面・<br>現地調査 |
| 外部空間 | 住戸内部／中庭・バルコニー<br>／砂浜・緑地の階層的構成 | 広場・テラス・遊歩道・中<br>庭、海へのヴィスタ複数 | 現地調査 |
| 動線 | 車両・歩行者動線を分離、グ<br>リッド単位に施設配置 | 広場から細街路への分岐<br>により回遊と滞留を促す | 現地調査 |
| 景観への<br>応答 | 白色仕上げの方形躯体 | 石灰岩の壁、勾配の浅い<br>屋根、職人らによる装飾 | 文献11・<br>現地調査 |

キャンディリスは1950年代のモロッコにおいてATBATモロッコを名乗り、「最大多数のための住まい」事業に参画していた。中でも「蜜蜂の巣」は、平屋建ての廉価型住宅「8×8」（ミシェル・エコシャール）の容量不足を、中庭をバルコニーに置き換えた中層の進化型住宅によって解決するものであった [27]。バルカレス＝ルカートの余暇集合住宅は、住戸とバルコニーを方形のユニットとして設計するもので、この系譜上にある（図 10）。また垂直方向の解決を図るという点では、なおCIAM的でもあった [23]。他方プイヨンは、被災者の敷地を単位として低層の住宅を幹線道路沿いに並べ、区画中央に広場を、そこから海へ向けてヴィスタを開いた。計画の力点は住戸ではなく、住戸相互のあいだに生じる外部空間の設計に置かれている。

図10 バルカレス＝ルカートの集合住宅 出典：文献23）

景観への応答においても、バルカレス＝ルカートが白色仕上げの方形躯体を砂浜に対して展開させるのに対し、レ・サブレットは大きく切り出された薄い黄色の石の外壁と、ミストラルに対応した勾配の浅い瓦屋根によって構成されている [11]。そして所々に設けられた職人の装飾によって、近代的な躯体の無機質さを和らげている。

なお、望月の定義に基づく1980年代以降の動きとして、レ・サブレットでは、1990年代に保全型の地区計画が策定された [13]。1999年にはフェルナン・ブローデル公園が地峡に開園し、今日の休暇村はプイヨンの集落とこの公園とが一体をなす空間として成立している [15]。

## 6. 結論

ミシェル・パシャ以来の休暇村であったレ・サブレットの復興計画は、被災者18名、住宅35戸と店舗28を中心とする一区画の再建であり、MRUの復興事業としては最小規模であった。法的要求事項である衛生設備を整えた上で、余った石材を元に廉価に仕上げた点は、庶民の生活の改善を志向するだけでなく、空間の多様性を住民が享受できることとの両立を目指す意思が確認され、プイヨンの作風が既に現れていることを示している。また、それをフランスのリゾート開発史の中に位置付けるとき、国家主導による開発にみられたような、従前の住民を追い出し家屋を取り壊すといった方向性に走らず、いわば現地再建を実現したといえよう。

実現されたレ・サブレットの都市空間は、鐘楼、中庭、アーケード、そして海へのヴィスタといった、地中海的多様性と定義しうる要素が盛り込まれていた。とはいえ、それは近代的な手法で再構築されたものであって、例えば装飾については過剰気味であったことも、自伝により示唆されている。

レ・サブレットの復興計画は、ラ・トゥーレットに続くプイヨンの佳作と位置付けられ、MRUによる評価を経てマルセイユ旧港の復興という「表舞台」へと導いた。この過程は、しばしば「謀略的」とされるプイヨンの人物像 [21]とは裏腹に、小さなプロジェクトに取り組み堅実な成果を上げた故の評価であったことが示唆されよう。

**【謝辞】**

本研究は、科研費基盤研究(B)「「もう一つのモダニズム」による地域性の再構築　フェルナン・プイヨンの生涯業績」（24K01047）の成果の一部である。現地調査の実施にあたり、2025年度筑波大学多文化共修支援事業を受けた。記して感謝申し上げます。

**【注】**

(1)同時代のモダニズム建築家がRCを基本とする工業化を志向したのに対し、プイヨンは石材を主要な構成材として用い、広場やヴィスタといった歴史的都市の空間構成を再構築しようとした建築・都市計画家である。

(2)プイヨンの修復した集落は、フランス文化省による「20世紀の建築遺産」に登録されている。

(3) 本研究では、一次資料としてプイヨンの自伝Mémoires d'un architecte(1968)を参照する。直接引用に当たっては仏文学者荒木亨によるニュアンスに優れた翻訳『石叫ぶべし』(1976;文献25)のテキストを必要に応じて修正し用いる。文献25の直接引用に限り、本文中に斜体で表記し、その末尾にページ数をカッコ内表記する。

(4)現地調査は、2024年6月8〜9日（松原）、2026年2月20日（坂元、直江、岡本、松原）と実施した。プイヨン関連資料はラ・セーヌ市文書館・行政法務部門担当責任者（Direction des Affaires administratives et juridiques, Responsable du service des Archives municipales, Archives de la Seyne）より共有を受けた。

(5)プイヨンはレ・サブレットの設計を建てたのち、その模型を事務所の友人であるアルフォンシに依頼した。アルフォンシは1942年からプイヨンと関係を持ち、7年間に渡ってプイヨンの設計を模型にしてきた旨が述べられている。文献25)p.88.

(6)ナポレオン3世の推挙により、1855年スルタン・アブデュルメジトからオスマン帝国灯台・標識局長に任命された。

(7)事前融資を受けた被災者は18名で、その多くは小商店主や漁師とい

った質素な人々であり、最も小規模な者は16平方メートルの木造小屋から30平方メートルの住居へ移ることとなった。

(8) 文献 11 には、murs en pierre massive récupérée des déchets de la reconstruction du Vieux-Portとある。

(9) プイヨンが担当した区画の外側の整備や公園の工事はMRU大臣ウジェーヌ・クロディウス・プティが担ったとされている。文献25) p.109。実際、ラ・セーヌ＝シュル＝メール市役所技術サービス局長が作成した1952年7月22日付の「サブレット地区境界内の空地整備および植栽(Aménagement des Espaces Libres du Périmètre des Sablettes – Plantations)」という表題の報告書には、整備に係る工費の80%をMRUが拠出する国庫補助金で賄い残りの20%を市が自己負担する形で、市の義務として空地整備工事と植栽の維持管理を担うことが記されている。

(10) 図7の主要な景観の写真については、括弧内()に転用された現在の用途を記載した。

(11) 文献 11 にはvoûtes d'arête en briques sur piliers en pierreとある。

(12) 市公式のパンフレットにEsplanadeと記載されている。主に海岸沿いの広い遊歩道を意味する。

(13) 文献 11)はclaustras de terre cuiteと記載している。

**【文献】**

1) Autran, Marius. *Histoire de La Seyne-sur-Mer (Var) Récits, portraits, souvenirs*. http://jcautran.free.fr/chronologie.html (26.04.22 閲覧)
2) Autran, Marius (1988) : *Images de la vie seynoise d'antan TomeII Des années dramatiques Des évènements inoubliables*, Géhess Éditions.
3) Autran, Marius (1997) : I*mages de la vie seynoise d'antan Tome VI L'isthme des Sablettes au fil du temps*, Géhess Éditions.
4) Bédarida, Marc (2012) : *Fernand Pouillon*, Editions du Patrimoine.
5) Bonillo, Jean-Lucien (2008) : *La reconstruction à Marseille*, Imbernon.
6) Cohen, Jean-Louis, Hubert, Christian (Tranatation) (2015): *France Modern architectures in history*, Reaktion Books Ltd.
7) Cyrulnik, Florence (2018) : *Les quatre vies des Sablettes espazium*. https://www.espazium.ch/fr/actualites/les-quatre-vies-des-sablettes (26.04.22 閲覧)
8) Delemontey, Yvan (2007) : *Industrialiser la pierre*, Le Moniteur. https://www.lemoniteur.fr/article/industrialiser-la-pierre.465829 (26.04.22 閲覧)
9) Edelmann, Frédéric (2003) : *Créer La Ville, Paroles d'architectes*, Éd : Le Monde, L'Aube.
10) *Fernand Pouillon Architecte*. https://www.fernandpouillon.com/sud est.html/#la%20seyne (26.04.22 閲覧)
11) Fernand Pouillon-Expo (2024) : *Les Sablettes, La Seyne-sur-mer*. https://www.fernandpouillon-expo.it/fr/projets/les-sablettes-la seyne-sur-mer/ (26.04.22 閲覧)
12) Furlough, Ellen and Wakeman, Rosemary (2001) : La Grande Motte: Regional Development, Tourism, and the State, in Baranowski, Shelley and Furlough, Ellen (eds.) *Being Elsewhere: Tourism, Consumer Culture, and Identity in Modern Europe and North America*, University of Michigan Press, Ann Arbor, pp.348-372.
13) Fuzibet, Agnès (2001) : La reconstruction des Sablettes, in Bonillo, Jean-Lucien (dir.) : *Fernand Pouillon, architecte méditerranéen*, Éditions Imbernon, Marseille, pp.206-213.
14) Gaignebet, Jean-B (1948) : Les chantiers de constructions navales de La Seyne, *La revue de géographie Alpine*, pp411-424.
15) La Seyne Sur Mer Département Du Var (2016) : *Aire De Mise En Valeur De L'Architecture Et Du Patrimoine Balaguier – Tamaris – Les Sablettes – La Baie Du Lazaret*.
16) Le Gallo, Yolande, Grellet, Aline (2007) : *Regards sur l'histoire de La seyne-sur-Mer Des hommes et des femmes qui ont fait La seyne compte rendu du colloque*, Histoire et Patrimoine Seynois.
17) Parrinello, Giacomo and Bécot, Renaud (2019) : Regional Planning and the Environmental Impact of Coastal Tourism: The Mission Racine for the Redevelopment of Languedoc-Roussillon's Littoral, *Humanities*, Vol.8, No.1, 13.
18) Racine, Pierre (1980) : *Mission impossible? L'aménagement touristique du littoral Languedoc-Roussillon*, Midi Libre, Montpellier.
19) Réseau Canopé (2017) : La Seyne-sur-Mer. Hameau des Sablettes, in Transmettre l'architecture contemporaine. Alpes-Maritimes, Var, Réseau Canopé Éditions, Nice, pp.103-108.
20) Vialard, Alice (2023): Intelligibility of Post-War Reconstruction in French Bombed Cities, *Urban Planning (ISSN: 2183–7635)*, Volume 8, Issue 1, pp 226-238.
21) Voldman, Danièle (2006) : Fernand Pouillon, architecte, Payot, Paris.
22) Voldman, Danièle (2006) : La reconstruction des villes françaises de 1940 à 1954.
23) ジョルジュ・キャンディリス, 三宅理一(訳) (1976):『リゾート集合住宅の計画と設計』, 鹿島出版会.
24) 戸田理香子, 松原康介 (2026): フェルナン・プイヨンのパリ郊外団地地区における共生空間 -「アルジェ三地区」との連続性の視点から-, 日本建築学会計画系論文集, 第91巻, 840号, pp.351-362.
25) フェルナン・プイヨン, 荒木亨(訳) (1976):『石叫ぶべし』, 文和書房.
26) 松原康介 (2021): マルセイユ旧港の戦災都市復興におけるフェルナン・プイヨンの参画 自伝『石叫ぶべし』にみられる計画論と地中海的ヴィスタの形成, 日本都市計画学会 都市計画論文集, Vol56, No3, pp.1007-1014.
27) 松原康介 (2019): 戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開 -ATBAT(建造者アトリエ)の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究 その2-, 日本建築学会計画系論文集, 第84巻, 760号, pp.1473-1483.
28) 望月真一 (1990):『フランスのリゾートづくり哲学と手法』, 鹿島出版会.

© 2026公益社団法人日本都市計画学会 本論文はクリエイティブ・コモンズ [表示-非営利-改変禁止 4.0 国際] ライセンス（https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja）のもと出版されており、出典を表示し、元の論文を改変しないこと、また、非営利であることを条件として、著作権者の許諾を得ることなく配布や複製などの二次利用をすることができる。